

論 文 要 旨

旧「満洲」における日本人を対象とした
中国語検定試験の研究

李 素楨

2007 年 4 月 1 日

目 次

序 章	1
1、研究課題及び時期	1
2、先行研究の概要とその検討	1
1) 植民地教育史の研究	1
2) 近代中国語教育史の研究	3
3) 本論文に関わる先行研究	4
3、本研究で明らかにする問題点	5
4、研究目的と資料調査	9
5、名称用語	10
1) 「満洲」	10
2) 中国語検定試験	10
第1章 中国語検定試験の成立と展開	12
1、検定試験の発端期	
— 明治三十七年（光緒三十、1904）～明治四十一年（光緒三十四、1908）	12
1) 最初の検定試験	12
2) 発端期の区分	14
2、検定試験の発展期	
— 明治四十二年（宣統一、1909）～昭和十二年（康德四、1937）	18
1) 検定試験の目的の更なる明確化	18
2) 奨励金額の変化	19
3) 検定機関の増加と試験範囲の拡大	20
4) 各種中国語検定に関する参考書の出版	21
3、検定試験の最盛期	
— 昭和十三年（康德五、1938）～昭和十六年（康德八、1941）	23
1) 『語学検定試験規定』の改定	23
2) 受験者数の増加	24
3) 試験結果に関する講評と巡回調査の実施	25
4) 検定試験の内容	26
4、検定試験の終焉期	
— 昭和十七年（康德九、1942）～昭和二十年（康德十二、1945）	30
1) 「決戦体制」下の試験内容	30
2) 試験応募者の職種の増加	32
第2章 中国語検定試験の規程、方法及びその合格率	36
1、各種の試験規程	36

1) 満鉄の規程	36
2) 関東都督府の規程	37
3) 「満洲国」政府の規程	41
2、各種の試験奨励	46
1) 満鉄の奨励	46
2) 関東庁の奨励	50
<u>官署職員の奨励</u>	50
3) <u>関東都督府の奨励</u>	51
<u>巡查巡捕の奨励</u>	51
4) 「満洲国」政府の奨励	52
3、試験形式及び方法	56
1) 地域・職業ごとによる区分	56
2) 試験の等級による区分	58
4、受験の合格率	61
1) 満鉄地方学務課の調査表	61
2) 「満洲国」教育司の調査表	65
3) 手書き謄写版による調査表	72
第3章 中国語検定試験の内容及び言語の特徴	75
1、日本人の「渡満」史	75
2、在「満」日本人の不安感	77
3、在「満」日本人の中国語学習	80
4、在「満」日本人の生活及び「満洲」の風土誌	83
1) 日本人の食住	83
2) 「満洲」の地理と交通	85
3) 「満洲」の気候	86
4) 「満洲」の風俗習慣	87
5、当時の植民地教育像	88
6、試験問題に現れた言語上の特徴	92
第4章 雑誌『善隣』に見る検定試験の実態	103
1、『善隣』の時代と性格	103
1) 『善隣』の時代—1930年～1945年	103
2) 植民地における語学雑誌の性格	104
2、『善隣』の主幹中谷鹿二	106
1) 中谷鹿二の出身	106
2) 学歴と職歴	107
3) 趣味と学問	107
4) 思想傾向	108
3、『善隣』の所蔵と欠号	110

1) 現在の日中両国における所蔵状況	110
2) 当時の販売状況と購読方法	112
3) 広告に掲載した在庫数	113
4) 当時の印刷状況	114
4、『善鄰』に掲載された「満洲」の語学資料	115
1)「満洲」の方言土語	115
(1)久保田久作と「満洲土語集」	115
(2)「海城県牛荘方言」をめぐる議論	117
(3)「満洲土語」の用例	120
(4)久保田久作の研究	130
2)「満洲」で使用された花柳界用語	135
(1)花柳界用語の例	135
(2)当時の社会状況の反映	140
3)「満洲」で使用された「隠語」	141
(1)「隠語」用例	141
(2)隠語に見る日中関係	144
4)「満洲」で使用された「日満合辦語」	144
(1)「日満合辦語」とは	144
(2)「日満合辦語」の特徴とその使用率「番付」	147
(3)「日満合辦語」の否定	148
5、『善隣』の検定試験対策	150
1)『善隣』と読者の関係	150
(1)投稿の奨励	150
(2)読者の質問に対する返答	150
(3)「読者の声」	153
2)模擬試験とその奨励活動	157
(1)模擬試験の回数	157
(2)奨励活動	158
(3)模擬試験の受賞者数	160
3)掲載された過去試験問題及び詳解	162
(1)過去問題の掲載	162
(2)過去問題の入手と解答の困難	163
4)注音符号の利用	165
終章	172
1、検定試験における皇民養成の社会教育	172
2、検定試験文献の日中関係史上における価値	174
3、「満洲」での検定試験対策の第一人者—中谷鹿二	176
4、検定試験の性格及びその位置付け	178
5、検定試験における「誘導」の手段	180

各種の表	182
1、「満洲国」語学検定試験委員会一覧表	182
2、『善隣』に掲載されている中国語検定試験問題に関する一欄表	188
3、中谷鹿二著作一覧表	204
4、「満洲」における中国語検定試験に関する年表	221
付録	
1、各種の試験問題（一部抜粋）	225
2、各種の試験規程及び関係書類	278
参考文献	304
各章の図表出典一覧	313

論文要旨

旧「満洲」における日本人を対象とした 中国語検定試験の研究

1、研究課題及び時期

本論は、旧「満洲」居住の日本人を対象とした中国語教育の一環としての検定試験をめぐる様々な事実とその歴史的展開に着目し、その検定試験にどのような理念が与えられ、どのような制度が構想されたのか、どこまで実行されたのか、どの機関により組織され、どのような人物が中心となったか、受験者の合格率や試験の内容を研究し、さらに検定試験の成立と展開の歴史を総合的に考察し、その実態を究明するものである。

本論が研究対象とした時期は、今より百年前、1904 年の日露戦争から、1945 年日本の敗戦、「満洲国」の解体までの 40 年間である。

2、研究の目的と先行研究の検討

筆者の研究目的は、現在に至るまで、誰も踏み込むことのなかった歴史の中のある事実を明らかにしようとするものである。筆者は、検定試験に関する散逸した資料を掘り起こし、旧「満洲」における未公開資料を整理し研究することにより、日本植民地教育史上のいくつかの問題を解明すると同時に、また日本の近代中国語教育史上における空白を埋めることができると考えている。さらに本研究の小さな窓口を通して現代日本における中国語教育の発展および現行の各種能力検定試験のさらなる充実、ひいては日中の平和と友好にも役立つであろうと信じる。

本論文の研究分野は、マクロ的に見れば日本植民地教育史に属するものである。

本研究と同じテーマの先行研究は極めて少ない。これまでに拙稿「旧満洲時代における日本人の中国語検定試験について」(2003 年 12 月 東アジア教育文化学会・第六回 中国重慶国際学術会発表)、「旧満洲・満洲国に在住した日本人の中国語検定試験の考察—受験者の合格率を中心として」(2004 年 3 月 桜美林大学紀要 『日中言語文化』第二集)など 5 篇の論文と、竹中憲一氏の『満洲における中国語教育』(柏書房、2004 年 11 月)の中の「第十八章中国語検定試験」を見る以外にない。¹したがって学界で注目されていない未踏の領域とすることができる。

（１）植民地教育史の研究

植民地教育史の研究においては、中国の学界では、はじめに日本の中国東北部への侵略に視点が置かれてきた。1986年10月、東北三省の社会科学院の研究者を中心として、東北淪陥14年史編纂委員会が発足し、その後数多くの研究成果が公表されている。代表的な著作として、王野平主編『東北淪陥十四年教育史』（吉林教育出版社、1989年）、斉紅深主編『東北地方教育史』（遼寧大学出版社、1991年）、盧鴻徳主編『日本侵略東北教育史』（遼寧教育出版社、1995年）、劉兆偉・許桂清主編『偽満洲国教育史』（遼寧大学出版社、2003年）などがある。上記の研究はいずれも、日本帝国主義による支配と、それに対する東北人民の抵抗という二つの側面から「満洲」と「満洲国」の研究を行っている。その中で、語学教育についてはほとんど中国人に日本語を「強制」的に学ばせたという「奴隸化」や、「同化」などの語学侵略の視点からの研究である。在満日本人教育について多少なりとも触れているのは盧鴻徳主編『日本侵略東北教育史』だけであるが、その検定試験の実態は明らかにされていない。

日本の研究においては、1980年代末から研究成果が次々と現れ、それに関する研究学会も設立されてきた。1987年の野村章著『「旧満洲国」皇民化教育』（エムティ出版、1995年遺稿集に収録）では、彼自身が植民地教育を受けてきた体験を書いたものであった。これを期に、実証的な植民地教育研究が始まった。

1991年「満洲国」教育史研究会が発足し、2005年まで7回の研究会が開催された。その研究会で発表されたテーマを見ると、日本の植民地教育研究の対象領域を、旧「満洲国」から東アジアの各国及び世界へと視野を広げている。研究の内容については、最初、侵略戦争に対する主観的な批判と譴責が中心であったが、その後客観的な理論研究への転換が行われるようになった。研究の方法については、90年代初期の「実証」研究を引き継ぎ、さらにフィールドワークの持つ意味が明確にされるようになった。例えば、1999年第3回シンポジウムでの旅順日俄監獄旧址陳列館（旧旅順監獄）、2001年東アジア教育文化研究会での西大門刑務所博物館（ソウル）、同年第5回シンポジウムでの九・一八歴史博物館（瀋陽）等の実地検証を通じての研究は、植民地主義の暴力性及び抵抗の歴史の意味を人々に実感させた。植民地教育史研究の目的については、歴史問題の解決の必要性和世界平和への貢献を明確にした。一方、植民地教育を近代化の一過程などとする言説もあるが、学界では主流になっていないと見られる。

以上のように、日本の学界でも中国の学界でも植民地教育史についての研究は少なくないが、中国語検定試験については殆ど触れられることがなかった。直接触れたのは筆者と竹中憲一だけであった。「当時、日本人に対する中国語検定試験が行われたのは事実ですか？」という質問を受け、これまでの学会でこの種のテーマが取り上げられることがなかったということを筆者は実感し、このテーマをより深く研究していくことを決意したのである。これが、本研究についての直接的な目的である。

1987年発表された野村章の実証研究以来、「満洲国」教育史研究会は『「満洲国」教育資料集成』全三期計27巻（エムティ出版、1992年～1993年）を編纂し、各

種資料の復刻版が出版された。その後、当時大きな影響力を持っていた著作、例えば、アジア学叢書『教育論』（大空社、1998年9月）の中の、「支那教育史」、「台湾教育の進展」、「現代支那満洲教育資料」など計9巻、柏書房からは『在満日本人用教科書集成』10巻（2000年、磯田雄一編）、緑蔭書房からは『「満洲」植民地日本語教科書集成』7巻（2002年、竹中憲一編）などが次々と復刻された。それらの一次史料が集成、復刻されたことは、旧「満洲」教育史研究における特徴の一つと言える。

しかし、多くの大型の一次史料が復刻されたが、中国語検定試験の問題に関するものは皆無である。そのことから、本研究の史料を調べる困難さを想像して頂きたい。

（２）近代中国語教育史の研究

本論文の研究は、ミクロ的に見ると、日本の近代中国語教育史に属するものである。この分野に関する先行研究は多くないが、倉石武四郎の『中国語五十年』（岩波書店、1973）、六角恒広の『近代日本の中国語教育』（不二出版、1984年）、『中国語教育史の研究』（東方書店、1988年）、『中国語教育史論考』（不二出版社、1989年）『中国語教育史稿拾遺』（不二出版社、2002年）、安藤彦太郎の『中国語と近代日本』（岩波新書、1988年）などの著作が見られる。これらの著作はいずれも戦前、日本の中国語教育は中国侵略に奉仕した実用会話主義の性格を持っていたと立論している。「明治以降における中国語は、昭和二〇（1945）年の日本敗戦を境に、その前と後では大きな違いがある。敗戦前の中国語は、明治以来の軍国主義的な国策に寄生する形で、日本の中国侵略に奉仕した実用会話主義の教育に終始した。そこには文化的内容を欠如した教育が行われた。この敗戦前の教育を反省するところから戦後の教育がなされた」と六角恒広は述べている²。

それに対して本論は、当時の一次史料を掘り起こし、実証的に研究することにより、「文化語学」は戦後になされたという説の再検討が必要であるという立場に立つ。

冒頭に提起したように本テーマに関わる先行研究は、拙稿および竹中憲一のものだけである。

先行研究としての拙稿は加筆して本論に取り入れたが、重要な観点やその実証などにおいては殆ど変えていない。一方、竹中憲一氏は「日露戦争軍政時期、居留民団（会）時期から「満州国」成立までを研究対象とした。（中略）「満州国」以降の中国語教育については、今後の課題としたい」³と研究対象時期を限定している。つまり「満州国」以降の中国語検定試験には触れていない。また、「善隣」という雑誌は当時中国語検定試験における最も重要な指南書として見なされていた資料であるが、「満州国」の第一回目の検定試験（1936年8月8日）より、6年も早く発刊されていた。しかも、はじめの3年間の雑誌は既に紛失し、残っているものは日中両国に点在している。特に中国の図書館では「特蔵」で貸し出しできない状態にあるなどの理由により、「善隣」を詳細に研究することは極めて困難である。そのため、竹中憲一氏の「善隣」に対する紹介は四行にとどまったので

あろう。

『善隣』を詳細に読み、分析すれば、多くの不明点を解明できる。例えば、「満洲」で中国語検定試験を実行した理由や、その試験が行われた時期、各段階の特徴、どんな機関が出題し、どのように実施したか、などの実態を解明すれば、従来の言説をいくつかを修正することができる。それに関する多くの例を本論の中で論じたが、この概要では文字の制限があるため、具体的な例を二つだけあげよう。

中国語検定試験は「満鉄の語学試験につづいて、関東州においても一九二五年（大正十四年）七月『関東庁及び所属官署職員支那語奨励規程』が規定された。（中略）。その後さまざまな職種に広がり…」と竹中憲一は述べている⁴。だが、本研究によると、関東州で実施された検定試験は「満鉄の語学検定試験につづいて」ではなく、逆に満鉄語学検定より 10 年前に実施されていたことは確かなことである。

「中国東北地域である日本の植民地には、日本国内では当時みられなかった語学検定試験が行われていた。それには 2 種の検定試験があった。1 つは関東庁の職員および巡査に対する語学試験であり、他の 1 つは満鉄職員に対する語学検定試験であった。いずれも関東庁ないし満鉄が主催するもので、その試験に等級を設け、それぞれの等級の合格者には、いずれも毎月語学奨励手当が等級に応じて支給された」と六角恒広は述べている⁵。実は、中国東北地域で行われていた検定試験は関東庁と満鉄の 2 種だけではなく、そのほか、更にそれより制度化された「満洲国」の試験もある。本論の第 3 章で「満洲国」政府実施の試験に関する規定や奨励、受験資格などを述べた。

3、本研究で明らかにする問題点

要するに、本研究で明らかにしようとしたことは、次の通りである。

第一は、「満洲」で実施された多様な中国語検定試験の実態を明らかにすることである。

本論で当時の中国語検定試験の問題を掘り起こし、当時の国策会社「満鉄」、国策機関「関東庁」及び「満洲国」政府の公布した各種の語学検定試験規程と奨励規程などを整理することを通じ、「満洲」植民地時代の語学検定が確かに存在したこと及びその各々の特徴を明らかにする。特に従来の検定試験が満鉄と関東庁の二種だけという言説に補足して、「満洲国」政府及び他の会社で実施された多様な語学検定試験の実態を明らかにしたい。例えば、雑誌『善隣』は 16 年の刊行期間で都合 86 回の模擬試験を実施し、1 等賞 40 人、2 等賞 94 人、3 等賞 96 人、賞外佳作 1027 人に奨励品を与えている。

第二は、「満洲」で実施された中国語検定試験の 40 年間にわたる歴史を四段階に区分し、各段階の特徴を考察することである。

それについては本論の第 1 章で論じるが、ここで簡単に四時期の区分を述べておく。

発端期——明治三十七年（光緒三十、1904）～明治四十一年（光緒三十四、1908）

においては、検定制度として関東都督府による『関東庁巡查巡捕特別手当支給規則』第4号訓令の公布があったのみである。「満鉄」などの検定試験は未だ行われていなかったし、試験問題の内容においてもその種類においても実用的な通訳のためのものであるという特徴を持っている。

発展期——明治四十二年（宣統一、1909）～昭和十二年（康德四、1937）には、検定機関が増加するとともに試験範囲も広がり、受験者数も増えてきた。各種の規程『関東庁所属官署職員支那語奨励規定』、「満洲国」政府『語学検定試験規定』などによって制度化されるようになった時期である。また検定委員会が置かれ、それが、検定の事務全般を統括することになった。

最盛期——昭和十三年（康德五、1938）～昭和十六年（康德八、1941）には、1938年に改定された『語学検定試験規定』第十二条によって、在満日本人全員に出願資格が初めて与えられ、「国策語学」に従う検定試験制度の整備が完了し、受験者数が激増した時期である。

終焉期——昭和十七年（康德九、1942）～昭和二十年（康德十二、1945）には、太平洋戦争の激化により、戦況の逼迫を反映して、「大聖戦」、「英米必敗」、「語学救国」などの語彙が目立つ一方、印刷や用紙の調達に困難を来し、ついには1945年の敗戦を契機に40年間の長きにわたる在満日本人向けの中国語検定試験が中止となった時期である。

第三は、「満洲」で実施された中国語検定試験は日本の外国語教育史上に例がない大規模なものであったことを明らかにすることである。

日本の英語検定試験制度が始まったのは戦後の昭和三十八年（1963）からである。「満洲」で実施された中国語検定試験はそれより50年以上早かった。その源流や、各段階の出題内容、受験者数、合格者数の変動、特に検定試験に関する各検定機関により制定された規程、法令を詳しく調査し、その上で中国語検定試験の歴史的 position を試みる。

第四は、「満洲」で実施された中国語検定試験の問題、その対策書等を掘り起こして語学検定資料の乏しいところを補足することである。

「満洲」で公の教育機関「満鉄」、「満洲国」、「関東庁」などの検定試験のみならず、民間学校、実業補習学校、各種の訓練所、特に、本論第4章で論じる『善隣』は、当時検定試験対策書として唯一の長く持続した民間雑誌である。しかし、それは戦後60年間のうちに埋もれてしまい、中に掲載されている当時の貴重な「文化語学」資料はだれにも見られなかったもので、戦前の中国語教育に関する評価が「実用語学」のみという結果になってしまった。特に『善隣』は「満洲国」の14年間と同じ軌跡を辿っているので、「満洲国」語学検定を研究する資料として、本研究で初めて掘り起こし、それによっていくつかの語学検定資料の空白を埋めることができた。

第五は、「満洲」で実施された中国語検定試験の研究から当時の語学研究者及びその業績について考察することである。

「満洲」で流行していた方言、土語を日本人としてはじめて研究した久保田久作、「軽声」を初めて研究した鳥居鶴美、花柳界用語や苦力用語などの言葉を初め

て研究した竹岡富三郎、「隠語」を収集し訳した笹平某（名前不詳）、日中風俗文化を比較研究した渡会貞輔、「日満合辦語」を否定した中谷鹿二などの語学研究の業績を考察する。これは学界で初めての試みである。特に「満洲」での中国語教育に多大な貢献をした秩父固太郎に比肩する中谷鹿二の生涯を考察し、戦後 60 年間埋もれていた彼の語学検定教育の業績を解明し、さらに彼の「語学報国」の熱意とその実態を世に披露する。それについては本論文の第 4 章で具体的に述べる。

第六は、日本の「満洲」経営に関する語学検定の目的を明らかにすることである。

「満洲」における語学検定試験に関する未公開の試験問題や、検定に関する対策書『善隣』などは、旧「満洲」に働く多くの日本人に親しまれた一種の教科書である。その中から日本の「満洲」経営に関する語学検定の目的がはっきり見て取れる。世界植民地支配史からみると宗主国の人々がかくも大膽に植民地の言語を学んだ例は、おそらく旧満洲においてのみであろう。

満洲国協和会は政府と表裏一体となり五族の協和、百業の振興を図るために建国と同時に国家機関としてその結成を見、爾来四年間当初の大目標に向かつて着々と進展して来たものである。在満日本人も満洲国の一員として他民族を指導誘掖する覚悟を益々鞏固にしなければならぬ時に当たっているので協和会は将来の指導方針、行すべき事業、会務運用の機構ならびに組織原則などに根本的に検討修正を加へ新たなる情勢に備へることとなった。⁶（日語満訳）

満洲事変以来日本帝国の青年、殊に最高学府に学ぶ未来の日満両国の指導的立場に立つべき有為の青年に対して、満洲建国の意義、溯つては満洲事変の因由、日満不可分の関係等を知らしめ満洲国に対する更に深い関心と研究心を旺盛ならしめんとする遠謀深慮の下に、なかば国家の名において学徒研究団の計画が立てられ数年以来実行せられてきたことは両国の将来のために衷心喜んでゐる次第である。⁷（日語満訳）

上記の試験問題から、在満日本人を五族中の最も高貴な民族で、指導民族だと深く信じさせる教育を実行したことが分かる。これは「中国語検定試験」が単に中国語ができる程度の資格というよりも「五族協和」の新皇民養成にその真の目的があったことを暗に示すものである。

特に「満洲国」成立以来、検定試験が「国策」に即応するため、「日満一徳一心」、「民族協和」、「大東亜共栄」などの語彙が、日常用語のように頻繁に各種の試験に見られるのである。

第七は、文化語学の萌芽が見られることを指摘することである。

「満洲国」の検定試験が、国家試験になったことにより、その文化語学教育の特徴も萌芽した。つまり、「満洲国」語学教育は、ある意味では戦後文化語学教育への萌芽と見なすことができないだろうか。

例えば、『善隣』に 10 年以上連載された「日支諺語対照集」と「支那風習談」

は、中国民俗文化を反映した語学書の力作であり、当時、大歓迎されたものである。中国語注音符号の運用について言えば、『善隣』が採り上げたのは、倉石武四郎著『倉石中等支那語』（昭和13年—14年）巻1—5より早かった。六角恒広は、この倉石武四郎の著書が出現したことにより、日本人は「中国語学習者を漢字から解放させ、外国語音として中国語を把握できるようにした」⁸としているが、実際には、「満洲国」中国語検定試験対策の参考書などには、日本国内より5年ほど早く注音符号が部分的に使用されていたのである。注音符号の学習の強調については、現存する最も早いものは、『善隣』第4年10号（1933）に取り上げられている。本論第4章で『善隣』の多くの日本人読者が中国語の文章に注音符号のルビを附することを要求していることから、「満洲」で日本人の注音符号の利用と普及は、「内地」より早かったといえることができる。

さらに、「文化語学」教育の例としては、「数詞（陪伴詞）の研究」⁹、「支那語慣用語の研究」¹⁰、「支那語特有の反語」¹¹、「複音形容詞」¹²、「四声変化の活用」¹³、「擬態擬音副詞」¹⁴、「文法講話」¹⁵などがある。

さて、「満洲」中国語検定試験教育を位置づけるとすれば、その主流は「満洲」支配に寄生し、それに奉仕した実用語学であったといえよう。しかし一方、最盛期には、文化語学の萌芽というべきものが見られる。即ち、実用語学という主流の傍に文化語学の支流も潺湲と沸き流れていたのである。

第八は、中国語を学ばせた「誘導」という手段を指摘することである。

「満洲」における植民地語学教育を一台の車の両輪と見なすならば、その一輪は中国人に日本語を学ばせることであり、もう一輪は日本人に中国語を学ばせることであったと考えられる。植民地語学教育の研究にはこの両輪のどちらか一方を欠いても完全な研究とはいえない。旧満洲は、ほかの植民地とは異なり、際立った特色を持っていた。台湾や朝鮮においては、そこに居住する全ての日本人に台湾語や朝鮮語の検定試験というものはなかった。ごく一部（警察と教員）に向けての試験があっただけである。世界の植民地語学教育の歴史からみても、植民地支配者及びその子弟に支配地の言葉を学ばせた例はほとんどなかったであろう。

検定試験は在満の全日本人に義務づけられたものではなかったが、試験に受かれば手当が支給され、給料も増え、昇格も早まる等の優遇条件が与えられる。或いは就職や卒業にも有利になる。さらに「満洲国」の文官制による中国語検定試験の可否は「躍龍門」（官吏になるための関門）と見なされた。即ち官吏を任免する条件の一つであった。これは利益誘導を含めた半強制的誘導であったと考えられる。

一方、誘導の目的は「五族協和」、「日満一体」等のスローガンの下に事実上の植民地支配を確立することであった。この目的に背くことは何人といえども許されない。

中国語検定試験はこの目的を遂行するための有為の人材を養成する手段の一つでもあったのである。

注

¹「中国語検定試験」第 18 章は、竹中憲一氏が早稲田大学法学会「人文論集」（1996 年）の中の「『満洲』における中国語教育（4）」という題名の論文に加筆したものである。

²六角恒広著『中国教育史稿拾遺』、不二出版社、1989 年、P33

³竹中憲一著『「満洲」における中国語教育研究』、柏書房、2004 年、P23

⁴竹中憲一著『満洲における中国語教育』、柏書房、2004 年、P339

⁵六角恒広著『中国教育史論考』、不二出版社、1989 年、P33

⁶国務院総務庁人事処編『満洲国語学検定試験問題集』、文明社、康德四年、P217

⁷前掲『満洲国語学検定試験問題集』、P222

⁸前掲『中国語教育史論考』、P38

⁹中谷鹿二主幹『善隣』（1930-1945、月刊）、大連善隣社、第 6 年 3 号、P38

¹⁰前掲『善隣』第 6 年 7 号、P27

¹¹前掲『善隣』第 8 年 12 号、P43

¹²前掲『善隣』第 5 年 8 号、P40

¹³前掲『善隣』第 8 年 12 号、P42

¹⁴前掲『善隣』第 10 年 4 号、P36

¹⁵前掲『善隣』第 15 年 1 号、P1

参考文献

中国語文献

- 長春市図書館『館蔵東北資料書目（旧日文）』謄写版、1985 年
- 陳学恂編『中国近代教育大事記』、上海教育出版社、1981 年
- 大連市図書館編『東北地方文献聯合目録』第 2 輯：外文（日、西、俄）図書部分、
上冊：日文図書部分、東北地方文献聯合目録編輯組、1984 年
- 大連市図書館・吉林省図書館・黒龍江省図書館編『東北地方文献聯合目録』第 2
輯：外文（日、西、俄）図書部分（下冊）、東北地方文献聯合目録編輯、1984
年
- 黒龍江省地方志編纂委員会編『黒龍江省志・教育巻』、黒龍江人民出版社、1996
年
- 遼寧教育史志編纂委員会編『遼寧教育史志資料』、遼寧大学出版社、1990 年
- 遼寧省档案科学技術研究所編『遼寧档案通覧』、北京档案出版社、1988 年
- 遼寧省図書館編『東北地方文献聯合目録』第 1 輯：報刊部分、東北地方文献聯合
目録編輯組、1981 年
- 盧鴻德主編『日本侵略東北教育史』、遼寧教育出版社、1995 年
- 齊紅深主編『東北地方教育史』、遼寧大学出版社、1991 年
- 蘇崇民著『満鉄史』、遼寧出版社、1997 年 7 月
- 王野平主編『東北淪陷十四年教育史』、吉林教育出版、1989 年
- 偽満時期資料重刊編委会『偽満州国政府公報』、遼瀋書社、1990 年
- 武強著『日本侵華時期植民教育政策』、遼寧教育出版社、1994 年
- 穎之著『中国近代留学簡史』、上海教育出版社、1980 年
- 袁家驥等著『漢語方言概要』、文字改革出版社、1960 年
- 政協吉林省委文史資料研究委員会編『偽満資料叢書 偽満人物』、吉林人民出版
社、1993 年
- 『吉林省志・教育巻』、吉林人民出版社、1992 年
- 中国吉林省長春「満洲国」皇宮庭内地下発掘された資料、2004 年

1945 年以降の文献

- 浅田喬二『日本帝国主義と旧植民地地主制：台湾・朝鮮・満洲における日本人大
土地所有の史的分析』、御茶の水書房、1968 年
- 『日本植民地研究史論』、未来社、1990 年
- アジア学叢書 55『現代支那満洲教育資料』、大空社、1998 年
- アジア経済研究所図書資料部編纂『旧植民地関係機関刊行物総合目録』、アジア経
済出版会、1975 年
- 『旧植民地関係機関刊行物総合目録・満洲国・関東州編』、アジア経済出版会、

1975 年

- 阿部洋『日中教育文化交流と摩擦：戦前日本の在華教育業』、第一書房、1983 年
- 蘭信三『「満州移民」の歴史社会学』、行路社 1994 年
- 安藤彦太郎『中国語教育の歴史的な性格』、早稲田大学政治経済学部、1955 年
- 『日本帝国主義と中国』、御茶の水書房、1965 年
- 『中国語教育の歴史と課題』、中国研究所、1968 年
- 『「急就篇」をめぐって』、日中学院、1985 年
- 『「戦争語学」のこと』、日中学院、1987 年
- 『中国語と近代日本』、岩波書店、1990 年、第 3 刷
- 石山洋[ほか]編『支那・満州国関係雑誌重要記事索引』、皓星社、1996 年
- 磯田一雄[ほか]編『復刻満州官製教科書：解説』、ほるぷ出版、1989 年
- 『「皇国の姿」を追って 教科書に見る植民地教育文化史』、皓星社、1999 年
- 宇都宮大学附属図書館編『宇都宮大学附属図書館所蔵満洲関係資料目録』、宇都宮大学附属図書館、1989 年
- 植田渥雄「中国における対外漢語教育」、桜美林大学、『中国文学論叢』、第 15 号 1990 年 3 月
- 「岡嶋冠山編訳『通俗忠義水滸伝』考」、桜美林大学、『中国文学論叢』、第 19 号 1994 年 3 月
- 「孔子の言葉とコミュニケーション」、桜美林大学、『日中言語文化』、第一集、2003 年 3 月
- 衛藤瀋吉『世界の中の日本』、講談社、1974 年
- 『東アジア』、ダイヤモンド社、1970 年
- 『日本人と中国』、東方書店、2003 年
- 『佐藤栄作』、東方書店、2003 年
- 『東アジア政治史研究』、東方書店、2004 年—『二十世紀日中関係史』、東方書店、2004 年
- 『アジアの曙：人物にみる近代史』、亜細亜大学アジア研究所、1988 年
- 『世界の中の中国』、読売新聞社、1969 年
- 『衛藤瀋吉著作集』、東方書店、2003 年 11 月—2005 年 11 月
- 王智新編著『日本の植民地教育・中国からの視点』、社会評論社、2000 年
- 王智新・君塚仁彦編『批判植民地教育史認識』、社会評論社、2000 年
- 大橋洋一訳『文化と帝国主義』、みすず書房、1998 年
- 岡部牧夫『満州国』、三省堂、1978 年
- 小川一朗『北京の日本学校』、朝文社、1994 年
- 外務省外交史料館蔵『外務省警察史』、不二出版社、1996 年
- 外務省通商局編『満州事情』、大空社、1991 年
- 加藤豊隆『満州国警察小史』、満蒙同胞援護会愛媛県支部、1970 年 10 月
- 『満洲国警察小史（第 3 編）—満洲国の解体と警察』、元在外公務員援護会、1976 年

-
- 『満州国治安関係法規集成』、元在外公務員援護会、1979年10月
- 鐘清漢『日本植民地下における台湾教育史』、多賀出版社、1993年
- 関東庁編『関東庁施政三十年史』、原書房、1974年
- 教育ジャーナリズム史研究会編『南満教育：在満教育研究』、日本図書センター、1994年
- 倉石武四郎『中国語五十年』、岩波書店、1973年
- 黄文雄『満州国の遺産：歪められた日本近代史の精神』、光文社、2001年
- 『台湾朝鮮満洲日本の植民地の真実』、扶桑社、2003年
- 国立国会図書館参考書誌部編『日本旧外地関係統計資料目録』、日本図書センター、1998年
- 小林秀夫『近代日本と満鉄』、吉川弘文館、2000年4月
- 徐敏民『戦前中国における日本語教育：台湾・満州大陸での展開と変容』、エムティ社、1996年
- 白取道博『満蒙開拓青少年義勇軍関係資料 第4巻』、不二出版社、1993年
- 鈴木健一『満州教育史論集：古稀記念』、山崎印刷出版部、2000年
- 鈴木亮・笠原十九司編『偽造された「満州国」』、ほるぷ出版社、1995年
- 石剛『植民地支配と日本語：台湾・満州国大陸占領地における言語政策』、三元社、2003年
- 戦後六十年記念総集編『富士の語りべの記』第九集、「富士の語りべ」の会、2005年
- 泰郁彦『日本陸海軍総合事典』、東京大学出版会、1991年
- 太平洋戦争研究会『図説満州帝国』、河出書房新社、1996年
- 田内高次『支那教育学史』、大空社、1998年
- 拓殖大学図書館『旧外地関係資料目録』、拓殖大学図書館、1984年—1999年
- 武田徹『満州国論』、河出書房新社、1995年
- 竹中憲一『「満州」における教育の基礎研究』第四巻、柏書房、2000年6月
- 『「満洲」植民地日本語教科書集成（6）』、緑蔭書房、2002年
- 『大連アカシアの学窓 証言植民地教育に抗して』、明石書店、2003年
- 「満州」における中国語教育（1）早稲田大学法学会『人文論集』1993年 P. 19～P. 126
- 「満州」における中国語教育（2）早稲田大学法学会『人文論集』1994年 P. 145～P. 186
- 「満州」における中国語教育（3）早稲田大学法学会『人文論集』1995年 P. 115～P. 158
- 「満州」における中国語教育（4）早稲田大学法学会『人文論集』1996年 P. 143～P. 186
- 「満州」における中国語教育（5）早稲田大学法学会『人文論集』1997年 P. 187～P. 22
- 「清末民国期の中国の間島における朝鮮人教育政策についての一考察」『人文論集』

1998 年 P. 83～P. 120

—『「満州」における中国語教育』 柏書房 2004 年

田嶋信雄『ナチズム外交と「満州国」』、千倉書房、1992 年

茶園義男『満州移民関係資料集成』、不二出版社、1990 年—1992 年

陳培豊『「同化」の同床異夢：日本統治下台湾の国語教育史再考』、三元社、2001 年

塚瀬進『満州の日本人』、吉川弘館、2004 年

槻木瑞生『「大東亜戦争」期における日本植民地・占領地教育の総合的研究』、皓星社、2001 年

東京文理科大学・東京高等師範学校紀元二千六百年記念会編纂『現代支那満洲教育資料』、大空社、1998 年

中野正剛『我が観たる満鮮』、ゆたに書房、1999 年

名古屋大学教育学部編『名古屋大学教育部紀要』、名古屋大学教育学部、1964—1997 年

那須清『旧満州地域における中国語の教育・研究に関する覚書（1）』、九州大学教養部、1966 年

—『満州発行中国語関係出版物仮目録』、九州大学教養部、1966 年

—『旧満州地域における中国語の教育・研究に関する覚書（2）』、九州大学教養部、1967 年

—『旧満州地域における中国語の教育・研究に関する覚書（3）』、九州大学教養部、1969 年

—『旧外地における中国語教育』、不二出版社、1992 年

—『北京同学会の回想』、不二出版社、1995 年

南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄付属地経営沿革全史』、龍溪書舎、1977 年

日本社会文学会編『近代日本と偽満州国』、不二出版社、1997 年 6 月

日本植民地教育史研究会『植民地教育史認識を問う』、皓星社、1999 年

—『言語と植民地支配』、皓星社、2000 年

—『植民地教育史像の再構成』、皓星社、1998 年

野々村一雄『回想満鉄調査部』、勁草書房、1986 年

野村章『旧「満州国」の皇民化教育』、育友会教育研究所、1986 年

—『満州・満州国教育史研究序説』、エムティ社、1995 年 11 月

波多野太郎『中国語学資料叢刊』、不二出版社、1984 年

浜口裕子『日本統治と東アジア社会：植民地期朝鮮と満洲の比較研究』、勁草書房、1996 年

林出賢次郎『皇帝の密約：埋もれた「満洲国」最高機密』、角川書店、1987 年

平塚益徳『中国近代教育史』、東京教育開発研究所、1985 年

-
- 平野健一郎『国際関係論のフロンテリア（2）—近代日本とアジア』、東京大学出版会、1984年
- 藤井省三『東京外語支那部』、朝日新聞社、1992年
- 古田俊彦『二つの国歌—私の満洲国—』、日本図書刊行会、1997年
- 星亮一『満洲歴史街道：まぼろしの国を訪ねて』、光人社、2000年
- 幕内満雄『満洲国警察外史』、三一書房、1996年4月
- 満洲医科大学史編輯委員会『柳絮地に舞ふ』、補仁会、1978年
- 満洲移民史研究会編『満洲農業移民史研究の基礎資料』、新人物往来社、1978年
- 満洲国教育史研究会『満洲国教育史の研究視角』、東海教育研究所、1993年
- 『満洲国教育資料集成』、エムティ社、1993年
- 『満鉄教育たより』創刊号～第39号・昭和9年～昭和12年、エムティ社、1992年複製
- 『満洲帝国文教年鑑』、エムティ社、1992年
- 満洲国治安部警務司編『満洲国警察史』、元在外公務員援護会、1976年
- 満洲帝国協和会編『協和運動：満洲帝国協和会機関誌』、緑蔭書房、1994年—1995年
- 満鉄文化映画論『満洲の記録・映像の証言・絢爛之満洲帝国』（ビデオ）、テンシャープ社、1994年
- 三好信浩『教職科学講座2 日本教育史』、福村出版株式会社、1993年
- 柳沢三郎訳『近代支那教育史』、大空社、1998年
- 山崎達夫訳『支那教育史』、大空社、1998年
- 山中恒『戦争のための愛国心』、勁草書房、2004年
- 山本有造編『「満洲国」の研究』、緑蔭書房、1995年
- 湯川次義『近代日本の女性と大学教育』、不二出版社、2003年
- 李素楨「中国語発音教育について」、『東海大学外国語教育センター所報』第15輯、1995年
- 「日中両国の教育について」、清水市文化会館講演稿、1996年4月20日
- 「中国語教育における中国語理解の必要性について」、『東海大学外国語教育センター所報』第17輯、1997年
- 「戦前における日本人向け中国語発音教材について」、『東海大学外国語教育センター所報』第18輯、1998年
- 「16世紀末—20世紀初中国における西洋科学技術文献の導入について —特に日本との比較」、『東海大学文明研究所紀要』第18号、1998年
- 『日中文化比較研究』、文化書房博文社、1999年7月
- 「旧満洲・満洲国に在住した日本人の中国語検定試験の考察 —受験者の合格率を中心として」、『桜美林大学紀要』日中言語文化第二集、2004年3月
- 「旧満洲における日本人中国語検定試験の研究—中国語検定試験の内容を中心として」、『桜美林大学紀要』日中言語文化第三集、2005年3月
- 「旧満洲における中国語検定試験の研究 —その規程、方法、言語の特徴につ

-
- いて」、『桜美林大学紀要』日中言語文化第四集、2006 年 3 月
- 「旧満洲における日本人教育の研究—散逸した語学検定試験文献『善隣』について、『桜美林大学紀要』日中言語文化第五集、2007 年 3 月
- 「旧満洲時代における日本人の中国語教育について」東アジア教育文化学会・第六回、国際学術会発表（中国重慶）2003 年 12 月
- 「偽満洲日本人漢語検定考試的研究」、中国社会科学出版社、論文集、2005 年 5 月
- 「日本人を対象とした中国語検定試験の歴史について」、日中人文社会科学学会設立大会発表（二松学舎大学）、2004 年 7 月
- 日中両国近代文化交流史の研究（その 1）——清代に翻訳された日本の化学書 日本京都、国際東アジア科学史学会発表、1993 年 8 月
- 李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』、凱風社、2000 年
- 六角恒広・横山広『中国語への道』、大修館書店、1986 年
- 六角恒広『中国語教育史参考文献・資料目録』、早稲田大学東洋文学会、1960 年
- 『中国語教育史の諸問題』、早稲田大学商学部商学同攻会、1960 年
- 『実用中国語教学の建設について』、中国研究所、1981 年
- 『近代日本の中国語教育』、不二出版社、1984 年
- 『中国語関係書書目』、不二出版社、1985 年
- 『東亜同文書院の中国語教育』、早稲田大学商学部商学同攻会、1986 年
- 『中国語教育史の研究』、東方書店、1988 年
- 『中国語教育史論考』、不二出版社、1989 年
- 『中国語教育二つの道』、中国研究所、1991 年
- 『中国語教本類集成』、不二出版社、1991～1998 年
- 『欧米人著作中国語関係書書目』、創価大学アジア研究所、1993 年
- 『中国語書誌』、不二出版社、1994 年
- 『軍事密偵と中国語』、早稲田大学アジア太平洋研究センター、1998 年
- 『漢語師家伝—中国語教育の先人たち』、東方書店、1999 年 7 月
- 『中国語関係書書目 増補版』、不二出版社、2001 年
- 『中国語教育史稿拾遺』、不二出版社、2002 年
- 渡部宗助・竹中憲一『教育における民族の相克』、東方書店、2000 年
- 渡辺中威『警察教育の先覚者たち』、立花書房、1982 年
- 渡部学・安部洋『日本植民地教育政策史料集成』、龍溪書舎、1987～1990 年
- 葵小学校同窓会『あふひ草・戦後 61 周年記念号』会報、小野印刷株式会社、2006 年、8 月

1945 年以前の文献

- 秋原勝二「草」、『廟会』、竹村書店、1940 年
- 池田秀雄『満洲統治論』、日本評論社、1934 年
- 石山福治『支那時文講義・附録・支那語及び支那時文試験問題集』、東京文求堂、

大正九年（1920）

—『現代支那書翰文例解』、文求堂、1930 年

入江寅次『邦人海外発展史』、井田書店、1942 年

牛島春子「二太太の命」、『大陸の相貌』、満洲日日・大連日日新聞、1941 年

内尾直昌『満洲国名士録』、人事興信所、1934 年

王秋螢「羔羊」、『華文大阪毎日』3 卷 8 期、1939 年

荻山貞一『満洲語教科書』、新京語学講習所、1938 年

—『満語華語検定試験の受け方とその準備』、東亜書院、1944 年

関東局官房学務課『在満日本人教育施設要覧』、関東局在満教務部、1942 年

関東局編『関東州統制法規集』、関東局官房文書課、1942 年

関東州庁内務局学務課『関東州の教育』、関東州庁内務局学務課、1936 年

関東庁『関東庁法規提要』（上巻）、関東庁、昭和九年（1934）四月再版

関東都督官房文書課『関東都督府法規提要』、関東都督官房文書課、明治四十四年（1911）十一月

国務院総務庁情報処編『満洲国大系－司法制度篇』国務院総務庁情報処、1934 年

国務院総務庁人事処編『満洲国政府語学検定試験問題集附講評篇・規程篇』、明文社、康德四年（1937）三月

国務院統計処『満洲国年報』、国務院統計処、1933 年

国務院法制局編『満洲国法令輯覧』第三卷、国務院法制局、康德七年（1940）

佐藤四郎『満洲における日本及び日本人』、満蒙文化協会、1925 年

志田延義『大東亜言語建設の基本』、畝傍書房、1943 年

鮫島国三・嘉村満雄『官署用会話読本』、新京満洲有斐閣、1944 年

嶋田道彌『満洲教育史』、大連市近江町一七文教社、昭和十年（1935）12 月

出版者不明『満洲国重要法令一覧』、出版社不明、1936 年

新京満洲司法協会編纂『満洲国政府語学問題及解答全集文官考試・検定試験』、満洲司法協会、1941 年

—『満洲帝国考試年鑑』、満洲司法協会、1943 年

満洲国政府『満洲国政府公報』、大同元年から康德十二年までで特に関係するもの
タイムス出版社編『中国及満洲国人名地名便覧』、タイムス出版社、1933 年

坪川与吉『中国人教育を願みて』・『南満教育』、出版社不明、1926 年 11 月

手島喜一郎『営口事情』、営口実業会、1920 年

東亜経済調査局編輯『満洲読本、昭和 12 年版』、東亜経済調査局、1937 年

長谷鎮広『満洲帝国主要法令解説』、清水書店、1940 年

中谷鹿二『善鄰』、大連善鄰社、昭和五年十月創刊（1930-1945）

—『旅行用支那語会話』、満蒙文化協会、大正十四年（1925）

—『日本語は斯うして支那語を訳ませう』、大坂屋号書店、大正十五年（1926）

—『真似鳥の飼い方と仕込み方』、文化生活研究会、昭和二年（1927）

—『日本語から支那語への道』、大坂屋号書店、昭和五年（1930）

-
- 『支那語は変る 新しい支那語を研究せよ』、大阪屋号書店、昭和五年(1930)
- 『華語助字の活用』、大連善鄰社、昭和七年(1932)
- 『華語動字の活用』、大連善鄰社、昭和七年(1932)
- 『華人専用簡易日語会話』、大連善鄰社、昭和八年(1933)
- 『華語慣用助動語の活用』、大連善鄰社、昭和十一年(1936)
- 『趣味の日語華訳』、大連善鄰社、昭和十二年(1937)
- 『やすく覚えられる支那語の会話』、大連善鄰社、昭和十三年 (1938)
- 『日語助詞的用法』、大連善鄰社、昭和十三年 (1938 年)
- 檜木野金作『内地、朝鮮、台湾、関東庁 巡查受験学科独習』、松栄堂書店、1933 年
- 南満洲鉄道株式会社地方部学務課『満鉄教育沿革史 (上下) 』草稿、昭和十二年 (1937)
- 日満文化協会『満蒙史論叢』、日満文化協会、1938—1943
- 日華實業協会編『満洲国重要法令並公文集』、日華實業協会、1932 年
- 波多野太郎『中国語文資料彙刊』、満蒙文化協会、大正十四年 (1925)
- 平塚益徳『近代支那教育文化史、第三国対支教育活動を中心として』、目黒書店、1942 年
- 富士匡・岩澤巖『満洲国大学専門学校入学試験問題解説』、東方印書館、1938 年
- 『満洲国大学専門学校入学試験問題解説』、東方印書、1939 年
- 『大同専門学校入学試験問題解説』、東方印書館、1939 年
- 富士匡『満洲国大学専門学校入学試験問題全科解説』、満洲国書文具株式会社、1943 年
- 福島正明編・中島比多吉校閲・度会貞輔注解『注釈関東庁・満鉄支那語奨励試験問題集』、大阪屋号出版社、昭和二年 (1927)
- 藤木敦実『(軍事と警察用) 満洲語会話』、東京外院学院出版、昭和十三年 (1938)
- 藤山一雄『新満洲風土記』、満日文化協会、1937 年
- 松京安衛・中谷鹿二共著『真似鳥の飼養和訓練方法』、東京文化生活研究会、1927 年
- 松本藤太郎『吉林日本人発展史』、吉林日本商工会議所、昭和十一年(1936)
- 満洲医科大学『満洲医科大学一覽』、満洲医科大学、1934 年
- 満洲開拓青年義勇隊訓練本部編『国語』(上下巻)、東京昌山房、昭和十八年 (1943)
- 満洲行政学会編纂『満洲国統制法令集』、満洲行政学会、1940 年
- 満洲国国務院法制處編『満洲国法令輯覧』、満洲行政学会、1934 年—1940 年
- 満洲国語研究会『満洲国語』、満洲国語研究会、昭和十五年(1940)
- 満洲国民生部『社会教育概要』、満洲国民生部、1939 年
- 『満洲国教育概況』、満洲国民生部、1942 年
- 満洲事情案内所『満洲関係資料集成』、満洲事情案内所、昭和十八年 (1943)
- 満洲事情研究部『満洲教育史略』、満鉄地方部学務課、1933 年
- 満洲評論社編『満洲国と協和会』、満洲評論社、1935 年

満鉄弘報課編『東亜共栄圏の鎖鑰：満州国の再認識』、満鉄・弘報課、1942 年
満洲帝国教育会編集部編輯、『満洲帝国教育会規程輯覧』、満洲帝国教育会、康德
8 年（1941）
満鉄地方部学務課『中国に於ける外人経営の教育事業』、満鉄地方部学務課、1922
年
—『南満州鉄道株式会社学事関係規則要覧』、満鉄地方部学務課、1924 年
—『教育施設概要』、満鉄地方部学務課、1930—1935 年
—『中国の教育制度概要並に東北四省の学校教育概況』、満鉄地方部学務課、1931
年
—『南満州鉄道株式会社学事関係規程』、満鉄地方部学務課、1933 年
—『満鉄教育回顧三十年』、満鉄地方部学務課、1937 年
満蒙資料協会編『満洲紳士録』第三版、昭和十五年（1940）
水野清一〔ほか〕『北満風土雑記』、座右宝刊行会、1938 年
三田清三郎「若草山」、『北満の一夜』、万里閣、1941 年
民生部教育司編『満洲国政府語学検定試験問題集』、満洲帝国教育会、1940 年
—『満洲国政府語学検定試験問題模範解答集』、満洲帝国教育会、1941 年
—『康德 9 年度 満洲帝国学事要覧』、新京泰東印刷、1943 年
民政部警務司『満洲国警察概要』、民政部警務司、1933 年
矢野太郎訳『露治時代関東州法規類集』、関東庁、1931 年
山元一雄『日本警察史』、松華堂書店、1934 年
渡会貞輔『支那語雑誌小史 1—3』、雑誌『支那語』5 卷 1 号—3 号、1936 年

上記のほか、旧満洲・「満洲国」に居住していた方々とその関係者に直接お会いし、あるいは電話、手紙などを通じて、個人の回想録、口述録音、アーケート、団体の思い出の例会など、さまざまな多くの資料を提供して頂いた、この場を借りて深く御礼申し上げます。